うるま市 地名散歩㉕

名嘉山 兼宏（なかやま けんこう）

石川前原（メーバル）（いしかわ まえはら）

前原の今昔

石川前原は、うるま市北西部の伊波と東恩納の間に位置する。一八七九（明治十二）年の廃藩置県以後におもに久米村や首里などから田舎下りしてきた人々の屋取集落で『石川市史』によれば当初は七戸ほどの屋取だったと伝えられている。

前原の人々は士族（サムレー）としての気位が高くお年寄りの中には戦後しばらくは頑固なまでにカタカシラ（王国時代の成人男性の髪型）を切らず、周囲からは「前原カンプー」と呼ばれたという。

戦前は、各村々にはいくつかの製糖工場があり、前原には昭和五十年代まで集落のシンボル的な存在として戦前に建てられた製糖工場の煙突が戦禍をまぬがれ空高くそびえていたが今はその威容は見られない。

戦後、集落の北西部は軍用地となって米軍の施設があったが返還後は近隣から移住する人たちが増え、一九五四（昭和二十九）年前原区として東恩納から行政分離した。

現在は、東恩納三叉路から仲泊を結ぶ県道六号線の沿線一帯には住宅をはじめ、公共施設・アパート・スーパーなどが建ち並び、かつて閑散として人影もまばらだった昔日の風景はなく都市的様相をおびてきた。急激な人口の増加により、一九八五（昭和六十）年には伊波中学校が創設された。

水玉屋（ミンタマヤ）

一八五三年ペリー艦隊が沖縄に来た時、その調査隊一行が具志川方面から恐らく田場、川崎、栄野比を通り、この前原一帯を通過したと思われる記録がある。その中に「小川をこえて・・・二哩（マイル）以上も登って行った後、我々は一つの峯を越した。道は、だんだん開けてきた・・・西の方に眺望が開けていた。この地方はアメリカの荒野に似ていた。窪地には沼があった」（『ペリー提督沖縄訪問記』外間政章訳）。

この文中の「小川」は天願川上流の栄野比のウフンガーラ下流付近で「二哩以上も登って行った」坂道はオオギビラ（青木坂）と考えられる。

そしてアメリカの荒野に似ていたところが坂を登りきった東恩納の南の丘から山城・伊波方面を眺めた風景で屋取集落のできる以前の前原一帯の広漠たる風景を描写したものだろう。かつては東恩納三叉路から県道六号線を伊波向け、一帯は平坦な地が広がり平原を思わせる景観をしていた。

また、「窪地には沼があった」というのは、石川高等学校の東側にある「水玉屋原」（ミンタマヤ）のことと考えられる。ここは現在埋め立てられて住宅が建ち並び跡形もないが昭和三十、四十年代までは大きな水溜りがあった。ミンタマヤは方言の「目ン玉（ミンタマ）」とイメージされ奇異な感を受けるが、これに類する地名（原名）は県内各地に十数か所も見られ、「ミンタマヤ」をはじめ「ミンタマヤー」「ミンタマラ」「ミッタメー」「ミズタマイ」「ミジタマイ」などと呼ばれている。漢字では「水溜」、「水玉屋」、「水玉栄」などと表記され、窪地で水が溜まる場所のことである。

他に沖縄では、水の溜まるところを「クムイ」とか「ムルチ」などと呼んでいる。

前原（メーバル）と後原（クシバル）地名

前原は旧具志川市と旧石川市にあるが、平成十七年の二市二町の合併により二つの前原の混同をさけるため「うるま市前原」と「うるま市石川前原」とした。マエハラの地名は県内には他に宜野座村の前原、宜野湾市の真栄原があるが、宜野湾市の真栄原はもともと屋取集落で「前原」であったが、「真に栄えるところ」という発展の願いをこめて昭和十四年に「真栄原」としている。

前原地名は県内では小字を含めると二百余を数え最も多い地名といわれる。一般的に「メーバル」と言っている。

東恩納の後方に後原（くしばる）という小字（原名）があるがこれは東恩納の後方にあるところという意味になり、前原は、本字である東恩納の前の方にあるところという意味になる。

また、後原（クシバル）は越原（くしばる）もあり、名護市の久志もある。久志は名護の（裏側）にあるからといわれるが、これは名護から山を越して行くところという意味も考えられる。

さらに、後原（シリバル）というときは、「志礼原」「志利原」「尻原」などと記されているところもある。